

## Consciousness

“意識”は心についての哲学と科学においておそらく最も難しい問題である。

意識とは何か？

意識は物理的な言葉で説明され得るのか？

意識それ自体が何か物質的なものなのか？

意識についての理論は可能か？

### A. General

Ned Block (Ch.24)

数多くの“意識”の意味を区分した。

現象的意識 [Phenomenal consciousness] (= experience?)

something it is like. 現象的意識的な心的状態とは例えば、色を見る、痛みを感じる、心的イメージや感情を体験すること。これらは皆、ある質的経験的特徴を持つ。

接近的意識 [Access consciousness]

情報へのアクセスに関するもの。

自己意識 [self-consciousness]

自身の表象に関するもの。

モニタ意識 [monitoring-consciousness]

自分の心的状態の表象に関するもの。

これら全ての意識概念が重要だが、現象的意識は最も難解でここでの大部分の論文の焦点。

Thomas Nagel (Ch. 25)

“What Is It Like to Be a Bat?”

“what it is like”という言葉での現象的意識の特徴付け(Blockによる)を引き継ぐ。

意識のこの側面に注目し、これは特に説明が難しいと主張した。

難しさの主たる根源

科学と哲学における標準的説明は客観的言葉で言うことであるが、意識はその性質からして主観的であるから。

我々はコウモリの脳の客観的機能についてすべて知っていたとしても、コウモリが主観的視点から見たときの“そのようであること”は知らないだろう。

Nagel は物理的な言葉で意識を最終的に理解することを拒絶せず、それにはさらなる概念的発展が必要だろうと提案している。

Daniel Dennett (Ch. 26)

“Quining Qualia”

クオリア(感覚質)とは、そのようであることを特徴付ける心的状態の特性[the properties of mental states that characterize what it is like to have them]を指す言葉。

Dennett は、クオリアが存在すると信じる理由がない、と主張する。

David Chalmers (Ch. 27)

意識についての hard な問題と easy な問題を分け、意識の唯物論に対する3つの主要な議論をまとめる。

思惟可能性[conceivability] 論法

知識[knowledge] 論法

説明[explanatory] 論法

これらの論法への反論の仕方から、理論的展望を分類する。物理的過程と意識との間の epistemic gap と ontological gap をもとに。

唯物論的見地

タイプ A: epistemic gap を否定する

タイプ B: epistemic gap は容認するが、ontological gap は否定する

タイプ C: epistemic gap は容認するが、それは原理的には閉じていると主張する

非還元論的見地

タイプ D: 二元論。相互作用説

タイプ E: 二元論。付帯現象説

タイプ F: 一元論。Panprotopsychism。

前者3つを批判し、後者3つを擁護する。

意識は物理的か非物理的か？

… 現代の哲学者の大多数は唯物論者

## B. The Knowledge Argument

知識論法とは…

意識についての真実[truth]は物理的な真実からは演繹できないものがある。よって意識は非物理的。とする論法

Broad(Ch.15)や Nagel(Ch.25)もこの立場。

古典的には Frank Jackson(Ch.28)のメアリー論法。

未来の神経科学者メアリーを想像してみる。彼女は白と黒だけの部屋で育った。彼女は脳についての全ての物理的真相を知っている。さて、メアリーは物理的事実は全て知っているが、意識についての全ての事実を知っている訳ではない。彼女は赤を見るということ[what it is like to see red]を知らない。彼女が部屋を出たとき、赤を見るということの知識が増すだろうから。よって意識についての事実は非物理的事実で、唯物論は誤りであり、付帯現象説が正しい。(と Jackson は言う)

このような知識論法に対する唯物論者の反論の仕方がいくつかある。

ほぼ全員が賛同することは、

メアリーは部屋を出たときに何かを学習するが、この新しい知識が唯物論を脅かすことはない。

Type-A 唯物論者 David Lewis(Ch.29)

メアリーは新しい事実の[factual]知識が増すわけではない。単に能力[ability](自転車に乗る能力のような)が増すだけだ。メアリーは白黒の部屋の中で何らの事実の知識も不足しておらず、物理的知識は完全である。

多くの唯物論者はこの主張を直観的に受け入れ難いと思っている。唯物論者たちにとってより普通の反論法略は、

Type-B 唯物論者 Brain Loar(Ch.30)

メアリーは事実の知識が増す。しかし、これは新しい見方をした古い事実の知識である。スーパーマンが空を飛べることを知っていた人が、クラーク ケントが空を飛べることを発見したようなものである。つまり異なった提示の様態[mode of presentation]をした同じ事実の知識。現象的概念[phenomenal concept](経験についての概念)は物理的特性[property]を捉えた認識的な概念であり、別々の特性ではない。

この方略がうまくいけば、唯物論者は物理的概念と現象的概念の間の gap を認めつつ、物理的特性と現象的特性の間の gap を否定することができる。

3つ目に、他の2つとはかなり違った方略

Daniel Stoljar (Ch.31)

物理[the physical]についての2つの真相を区別する。ひとつは物理的理論[theory]の真相、もうひとつは物理的対象(物?)[objects]についての真相。メアリーは物理的な真相についてひとつ目の意味で完全な知識を持っているが、ふたつ目の意味ではそうではない。よって知識論法は唯物論に対して何の力もない。

## C. Modal Arguments

Descartes の第六省察(Ch.1)にて

私は体なしに存在する自分を想像できる、よって私が体なしで存在することは可能である、よって私は物理的ではない。

様相論法とは・・・

意識と物理的過程との間の乖離の思惟可能性[conceivability]から、そのような乖離の存在可能性[possibility]へ、そして唯物論の否定へと進む論法。

Chalmers(Ch.27)のゾンビー論法：物理的には意識的存在と同一だが意識的でない生物、ゾンビーの想像可能性から、ゾンビーの存在可能性を推論し、唯物論を偽とする。

Saul Kripke (Ch.32)

真の同一性(熱は分子の運動である、など)は必然である。

熱が分子の運動であることを想像できるけれども、我々が現実には想像しているのは分子の運動ではない何か(熱の仮象(現れ、見かけ)[appearance])を持っているということである。

いかなる心的状態(e.g. 痛み)や物理的状态(e.g. C 繊維の発火)に関しても、我々は物理的状态と一緒になくとも心的状態を想像できるし、その逆もまた然り。

痛みの現れはそれ自体痛みであるので、心的状態の現れに関しては単にこのように言い逃れることはできない。よって心的状態は物理的状态なしに存在できるし、逆もまた然り。

Kripke はタイプ同一性やトークン同一性理論に対してこの論法を使うが、関連する論法はより一般的に唯物論に対して出されたものである。

Christopher Hill(Ch.33)

Kripke や関連する論法への応答。Nagel の発展。

意識的な心的状態の伴わない物理的状态の想像可能性は、Kripke とは違った方略で説明しうる。

物理的状态を想像するのと心的状態を想像するのでは関係する認知的能力がかなり違うので、たとえ現実には心的状態と物理的状态が同じであったとしても、想像ということに関してこれらが成すことは異なると期待すべきである。

これは心的概念と物理的概念との大きな違いをアピールしつつ、それら概念は世界の同じ特性を指しているという、type-B 唯物論者的方略の一事例といえる。

Grover Maxwell(Ch.34)

心的状態の mere appearance に関しては様相的直観は説明され得ないということは Kripke に賛同するが、物理的状態の mere appearance に関しては説明され得る。

心的状態のない物理的状態を想像するとき、我々は単にオリジナルな物理的状態と同じ構造や効果を持つが同じ内在的特性を持たないシステムを想像している。

この考え方では、物理的な言葉は厳格に基本的な内在的特性を示し、そして内在的特性は心的特性を必要とするかもしれない。

“nonmaterialist physicalism”

## D. The Explanatory Gap

意識がそれ自体物理的かという問題は、時々、意識が物理的言葉で説明できるかという問題とは区別される。

前者の問題は物理的過程と意識との間の存在論的つながりに関する問題。

後者の問題は “ 認識的[epistemic]つながりに関する問題。

たとえ意識が物理的であっても、意識について説明することは回答不可能な問題だという哲学者もいる。

Joseph Levine(Ch.35)

Kripke のような認識的考察は唯物論を論駁しないかもしれないが、物理的過程と意識との間の説明的ギャップが出てくる。

意識の伴わない物理的過程を想像できるという事実は物理的言葉による意識についての完全に満足のいく説明を得ることはできないことを意味している。

この種の還元的な説明は低水準[Low-level]記述と高水準[High-level]記述とのある種のアプリオリな概念的つながりを必要とする。

意識においてはそのようなつながりはなさそうなので、説明的ギャップは広く開いたまま。

Paul Churchland(Ch.26)

物理的過程と意識との間に原理的に gap はないと主張。

意識についての論法を「光は還元可能ではなく、物理的言葉では説明できない」という一連の論法と対応させた。これらの論法は誤りで、よって対応する意識についての論法も同じく誤りだとした。

光に関して説明的 gap が閉じているなら、意識に関して閉じていると期待できる。

Block & Stalnaker(Ch.37)

Levine の見解、Jackson と Chalmers の見解に反論

還元的説明は低水準の記述と高水準の記述の間にアプリアリな包含関係[entailment]を要求しない。

ほとんどの高次な概念は包含関係を支持するために Levine のような方法で分析できない。

意識においては分析や包含関係の不在は還元的説明は障害ではない。

これは、意識は物理的でかつ、意識は物理的言葉で完全に説明され得るというタイプ B 唯物論の見解への扉を開いている。

Colin McGinn(Ch.38)

意識の適切な理論を持つことはできないかもしれない。

それは、如何なる説明も存在しないからではなく、我々人間の制限付きの心が正しい説明に対して認知的に閉じている(すなわち、我々の理解の力を超えている)かもしれないからである。

(この見解はタイプ F 一元論の要素を持っているかもしれないが、タイプ C 唯物論との多く共通点がある)

意識とは物理的特性に基づいているかもしれないが、我々は知覚によっても内省によってもそれを捉えることはできないので、その特性は我々にはアクセスできない。

これが正しければ、何かの可能存在が心身問題を解くことができるかもしれないが、それは我々にとって永遠に閉じたままだろう。

## E. Higher-Order Thought and Representationalism

もし意識がより単純な言葉で説明され得るとすれば、どのように説明されるのか？

意識についての理論のいくつかは神経的 and/or 計算機的メカニズムを擁する科学理論。

他の理論は意識を前提しない他の概念で意識を説明する哲学理論

高次思考理論

表象主義理論

意識についてのより高次な理論は、原初状態へ向けられたより高次の心的状態[a higher-order mental state that is directed at the original state]の存在という点で意識的状态を説明する。

これらの理論は高次知覚理論と高次思考理論に分けられる。

David Rosenthal (Ch.39)

意識的状态は我々がそれについて意識している状態である、という前提から、

心的状態はそれが適切な種類の高次思考の対象であるときに意識的である。

Fred Dretske (Ch.40)

意識(事実についての意識、物事についての意識)の多くの様々な側面を区別。

視覚経験に関する例を挙げ、本人が意識的でないような意識的経験の特徴があり得ると主張。

よって意識の高次思考理論は間違っている。

意識的状态は我々がその状態について意識的であることに立ち返らず、むしろ我々を世界について意識的にする状態に立ち返る。

### 表象主義理論

意識はある種の表象に還元可能である

意識的状态の性質はそれが世界を表象する方法に尽きる。(?)

Christopher Peacocke (Ch.41)によって議論され論駁された

Peacocke はある種の表象主義を“Adequacy Thesis”として定式化し、これを誤りとした、なぜなら経験が表象的内容とは無関係な特徴を持つことがあるから。

Peacocke はそれらを経験の感覚的[sensational]特徴(クオリアのことでしょう)と呼び、経験の表象的特性の上にあると考えた。

Michael Tye (Ch.42) は表象主義を主張。

知覚的意識はその表象的内容によって説明される。

知覚的クオリアがあると定義し、世界を経験することに対応するクオリアがあることを受け入れ、表象的特性と等価であるとした。

意識経験の“透明な”世界に向けた性質を考察してこの結論へ。

様々な異議(Peacocke も)を論駁し、その見解からの帰結のひとつは、経験の特徴は当人の内的状態によって完全には定められないというもの。

Sydney Shoemaker (Ch.43) は Peacocke と Tye の中間の表象主義を主張。

Tye と同様、クオリアは表象的特性と等価であるとしたが、この表象的特性の内容はクオリアそれ自体に関するものであると主張(Peacocke の Adequacy Thesis のように)。

質的状态は世界をその状態とのある関係性に立つものとして世界を表象した。

内容がクオリアという言葉で特徴化されることにおいて、彼の見解のこの側面は非還元的である(表象主義それだけで意識の還元的な見解を伴わないというのは価値がない)。

これに機能主義的主張を追加し還元論的見解を生み出した。

この見解は、関係のある表象的特性は当人の内的状態によって決まるという点で Tye とは異なる。

彼は知覚の内容についての微妙な疑問の多くを考察することでこの見解を発展させ、内政の分析にこの見解を適用した。